



Moon Drops

Drops

R18

Honkai: Star Rail
Unofficial fanbook

Dan Heng x Stelle

contents

My sweet star_なるかみ	P05
丹星VS潮吹き_はるお	P31
Illust_ronm	P55
Illust_PiPi	P56
許したが最後_差斜	P57
Illust_ともし	P67
拒否権は無い_らま	P69
この後朝まで解放されなかった	
_siriカブトムシ胃袋	P75
ぜんぶあげたい_佳	P79

♡何でも許せる方向け♡

この本は個人的に作られた非公式ファンブックです。
原作者様・出版社様とは一切関係ありません。
無断転載・複製・複写・Web上への掲載(SNS・ネットオークション・フリマアプリ含む)は禁止です。
二次創作をご存じない一般の方や、関係者様の目に触れぬようご配慮お願いします。
公共の場での閲覧はご遠慮ください。

I wholly prohibit the following acts concerning this book:

- ・Uploading on website or any other social media.
- ・Putting up for auction.
- ・Resale

Thank you for your cooperation.





「My sweet star」なるかみ







ちゅる

愛し合うのも
風流ってことで

まあまあ

たまにはこういう
俗っぽいところで



ビクッ

ぐ……っ



んー、
ひよっぱい

あむっ



まずいとは
言っていないよ



なら……っ、
啜えるのをっ、

止めたら
どうだ……っ

ちゅるっ

ちゅ、





びゅる

んっ…!?

ぐう…っ

それは…っ、

びゅくっ



はあ…っ



はあ…っ

は、

は、



はあ…っ

びゅくっ



はっしょんっ

すまない

これでいいだろう

ぱん

ぱん

雲吟の術って
こういう時にも
便利だね

こんな形で不本意だ
使いたくはない



……

星

俺も、お前に
させてくれないか

えっ

嫌か？

い、嫌じゃ
ないけど……



だって……

丹恒に
してもらおうと

動けなく
なっちゃう
んだもん



私だって丹恒に
してあげたいよ



わ、わかった



それなら
加減はする

それに俺は
もう充分して
もらった



お尻を
こっちに
向けて

ちやい



なら、その
壁に手を
ついてくれるか



ああ
そうだ

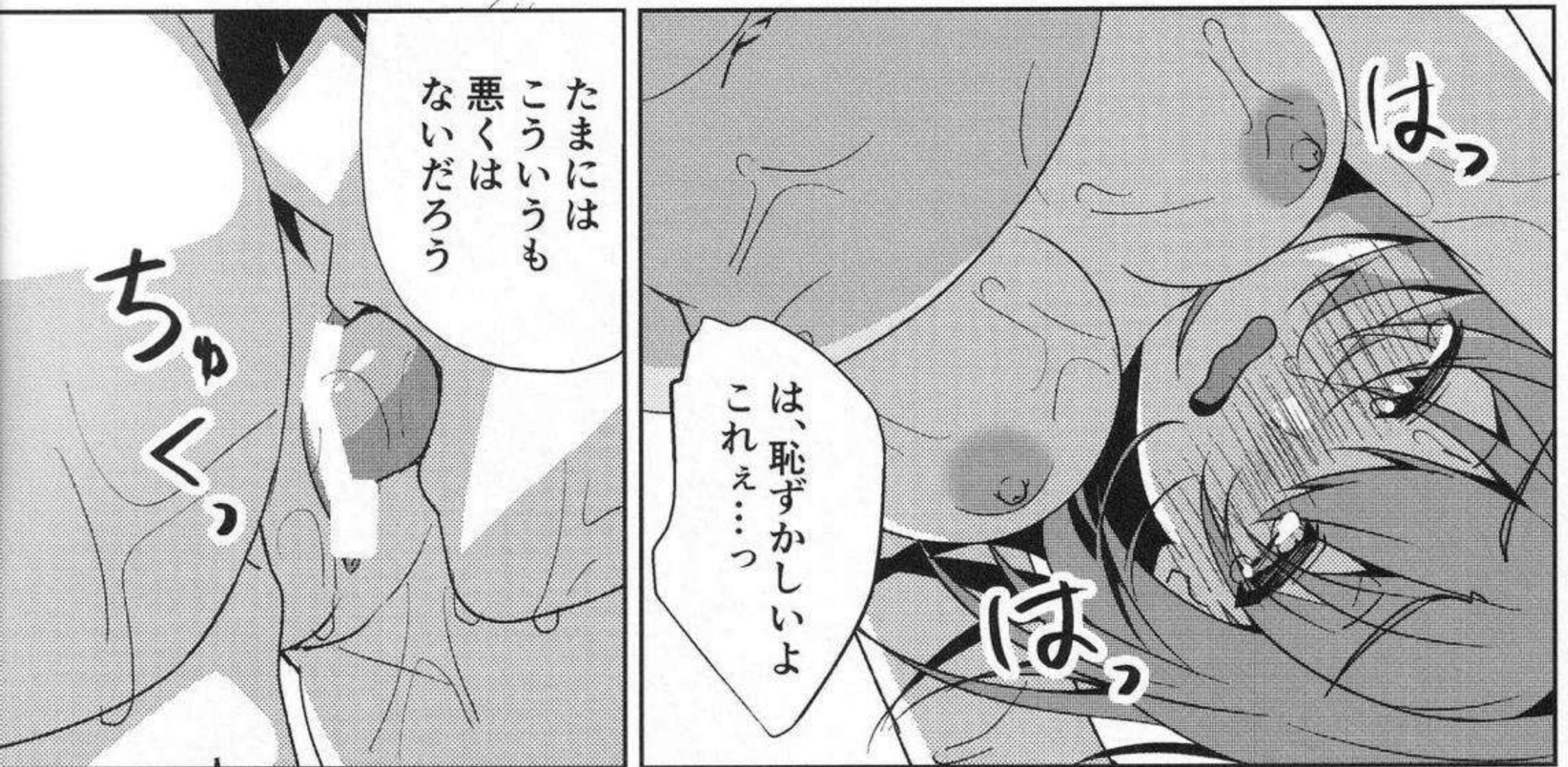


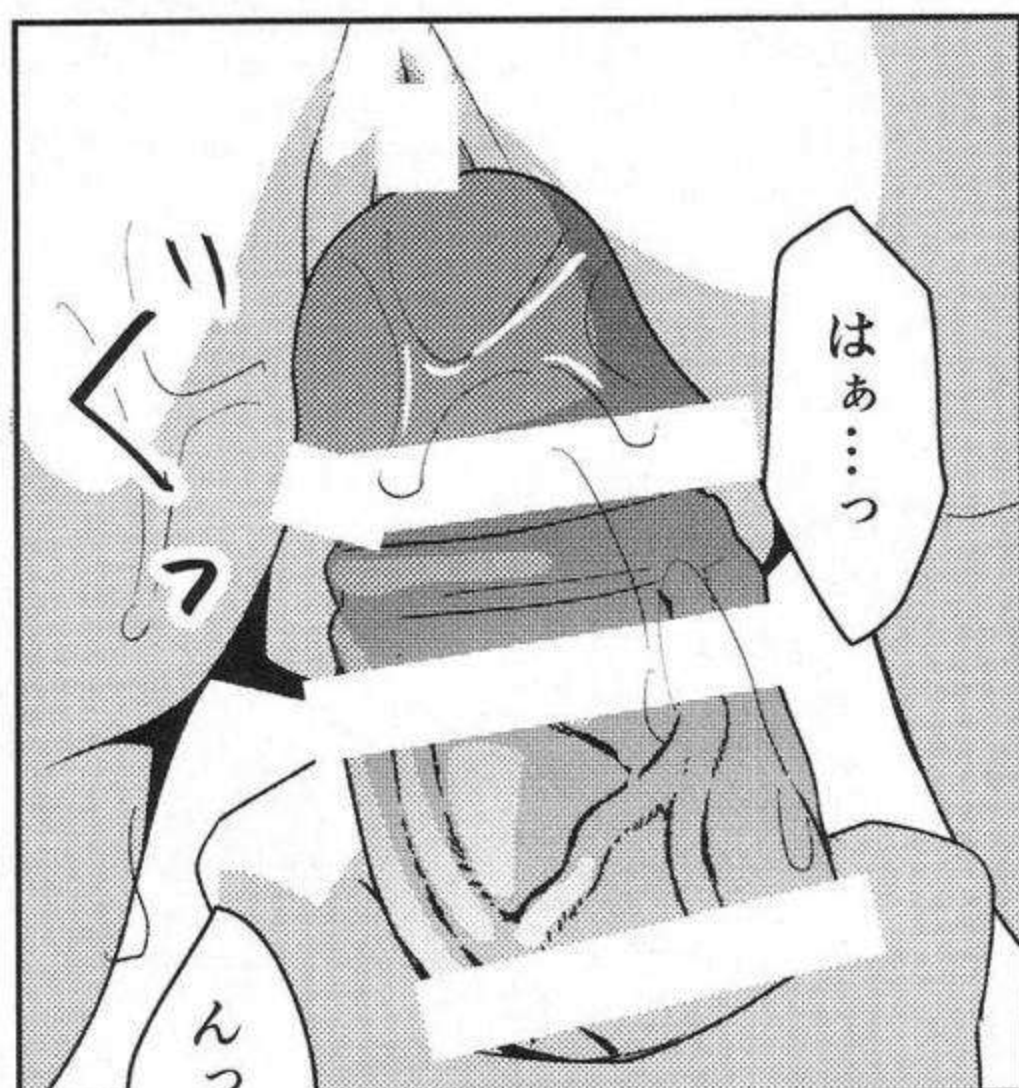
う、
こ、こ、こ...?



ちや
は。









もう少し
慣らして
やりたいが

これだけ
ほぐれていれば
大丈夫だろう



今まで
散々

煽られたんだ

まっ

くちっ



は、あ…っ

お前の中は、
いつも温かくて
気持ちが良い

みちっ



あ、あっ!?
お、く……っ

お、く……!

ずっ

ずっ

やめっ

やあ

お前が、好きな
ところだ……っ

ああ……っ、

ぐり

ぐり

ぐり



なるほど

滑りが良いのも
悪くはない

ちゅ

ん

ん
ちゅ



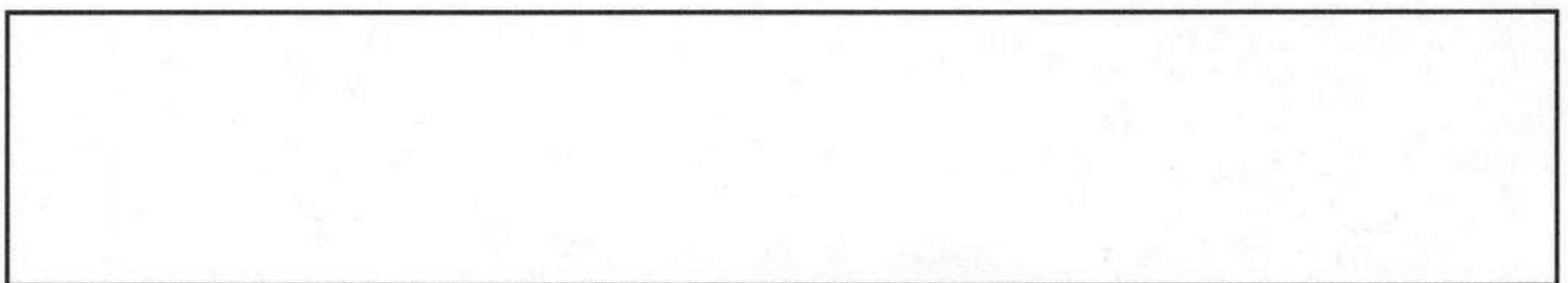
















…ああ、
不覚だ

貴重なものが
見れたのは
良かったがな

うっ、
その…

我慢できなかった
のは忘れてよ

でも、



たまには
こういうのも
悪くないでしょ

俺は
星に甘い



気づいたら
いつもこいつの
ペースに
飲まれてばかりだ



だが、

ああ、
そうだな



たまには

悪くはない





Moon
Drops

Moon
Drops







ノックくらい
しろ

いやいや
それどころじゃ
ないでしょ!



ちよつと
丹恒~~~~

ひどい
じゃん!



なんで教えて
くれなかったの

男の人も
潮吹き
できるって!



ネットの
えっちな
広告で見た



.....
どうでさんな
ことさ

毎回私のことばかり
ぶしゅぶしゅさせてさ

ずるいと
思わない!?

…嫌だった
のか?

嫌じゃないけど!

でも平等じゃ
ないと思う!

私ばかり
いつもあんなに
気持ちよくなって…

できるなら丹恒にも
あの気持ちよさを
体験してほしいよ

星…

だから
今晚やろう

は？

もう色々準備して
あるから

やろう
男の潮吹き

はあ



はっ

…ッ

カチャ
カチャ

まずは
一回射精してから
なんだって

ハッ
ハッ





先っぽ中心に
刺激を与える…



なんだこの
せり上がってくる
感覚は…ッ





せつ...

やめ...ッ

ドン

バク

バク

バク

バク

おは

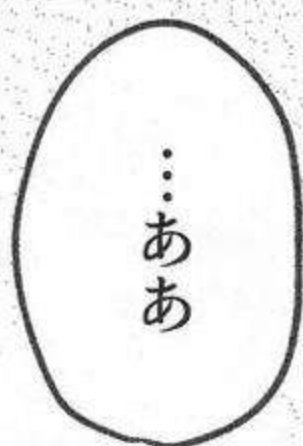
おは...

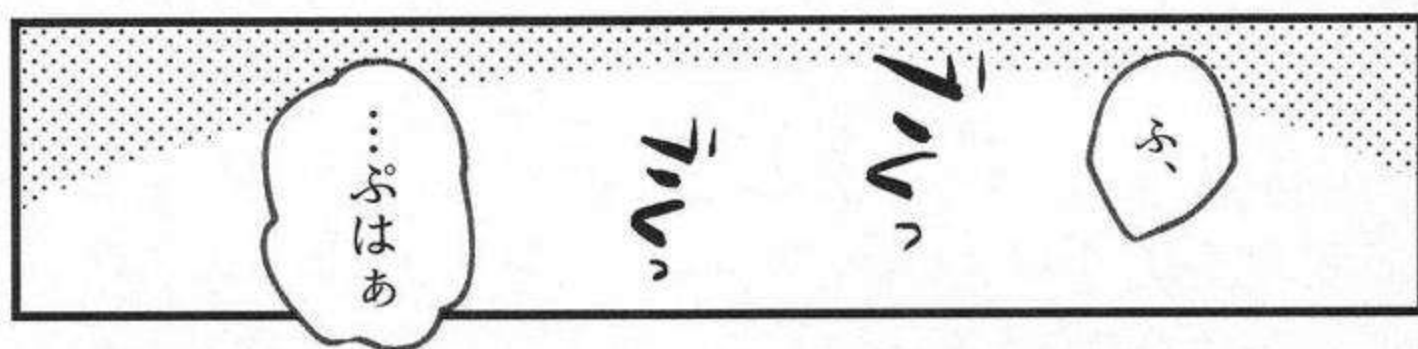
おは...

おは

おは









すまない

お前を
いじめたい
わけじゃないんだ

お前が俺で
感じてくれている
ということが

目に見えて
わかるから
だろうか

…嬉しくて

つい必要以上に
攻め立てているという
自覚はある



丹恒が
喜んでくれるなら
もう潮でもなんでも
体中の液体を
出せる気がする

そこまでは
いい……



私の番が
可愛い



はちゃん。

潮を噴かせることに躍起になってない!?

もう何回イったか
覚えてない……

考え事か？

余裕だな

20
h

1827

井



ううっ…
だめって
言ったのに…

今日は
俺の好きにして
いいんじゃない
なかったのか？

限度という
ものが…

うわこれ以上の
水分補給はいらな
うわああああああ



すまない
無理をさせたな

もう十分
満足した

最後は一緒に

星

…うん



俺も

もう、

出そうだ…ッ



グググ

これはひどい

べい

でも流石に
私は悪くない
でしょ

キラ



ああ
お前は何も
悪くない

全て
俺に任せろ

雲吟の術
便利すぎいゝ

こんなことに
使って
罰が当たりそう

雲吟の術
便利すぎいゝ

こんなことに
使って
罰が当たりそう

使えるものは
利用すべきだろう

使えるものは
利用すべきだろう

…風呂に
入るか？

それとも
世を濯がん、
するか？

お風呂

ふふっ

連れてって







この後風呂場で
2回戦目に
突入した

Moon
Drops





ありがとうございました♡
ronm

せうちゃんか拾ってきた
奇物でシッパ化し回目的
たんこ先生(説明)

...

ごごめん
たんこー...

仕置きだな

え

ご都合奇物!!

まだ
一時間経って
ないぞ

一時間!?

ぺろぺろ
だめえ...

やっ♡

あッ

イッ♡

長すぎッ

ちゅ♡♡

許したが最後

差斜

「う、あ、ああ……ッ」

快楽を逃しきれず痙攣する体。絶頂の波に浸っている柔らかな膣内から、ずるりと異物感が抜けていく。濡れそぼった手元を見やってから、丹恒は小さく息をついた。

「……星」

「ん……」

「舐めてもいいか」

直球のお伺いにきゅっと息を呑む。彼がどこか改まった表情でその申し出をしてくるのはまああることだ。というのも、私はその行為に関してだけはいつまでも慣れることがなく、ひどいときには恥ずかしすぎて息をするのもままならなくなってしまうからだ。そんな様子を少なくない回数目にしているから、丹恒なりに気を遣ってくれているのだろう。

「……あとで、私にもさせてくれるなら、いいよ」

私の言葉に頷くと、丹恒は寝そべる私の体の横から太腿の間へとゆっくり片膝を移動させる。シャツの内側にすると指が滑り込んで、胸元までたくしあげられていく。彼の眼前に晒されたお腹、その中心にひとつ、口付けが落ちた。無意識に詰まらせていた吐息がほどける。さらさらと乾いた指先はそのままインナーと素肌の間に入り込んで、シャツごと首

元まで引き上げられた。守るものを失った胸が彼の眼下で揺れる。その柔らかさを確かめるように、服を脱がせた手がそっと輪郭を撫でた。恥ずかしい。丹恒の触れ方は、いつも、私をひどく大切に扱うからどうにも慣れない。

ひとつ、ふたつ、お腹から胸元にかけて口付けが落とされる。それがやがてどこに向かうのかは察しがついた。この男は、そうやって私を焦らす。もう片方の手に太腿の内側をゆるりと撫でられ、くすぐったさにぴくりと目元が震える。

唇が、胸の天辺に触れた。

「……っ」

声は喉元に押し込んでしまった。だってこの部屋は明るいまま、日常との地続きをいやでも感じてしまっただけ。いや、既に一度イカされているのに今更かな。でも仕方ない、私の恥じらいはまだ胸中で息をしているのだ。

薄く開いた唇の奥から、舌先がちゃんと差し出される。やわくつつかれたあと、乳輪をくるくるとなぞって、また中心へ戻って。そうして可愛がられた桃色はみるみる芯を持ち始めて、その存在を主張してしまう。軽く吸い付かれると同時に、不意の感触が下半身を襲った。

「んっ、……！」

達した後のそこはぬかるんでいて、彼の指を簡単に受け入れていく。

内側で蠕く二本の指、それに時折親指が外側の突起をく

くにと弄つて、不規則にもたらされる快感にじくじくと思考が侵食されていく。弱いところを掠めながら、ほぐすような指の動き。それが何のためにされているのかはわかっていた。胸元で愛撫を続けながら時折漏れる吐息が色っぽくて。丹恒が、私を気持ちよくするためだけにこんなことをしている、と思うだけで脳髓に電流が走るように痺れてくる。

引き抜かれた指が秘豆を挟み込むと同時に、左胸を口内でぐりぐりと舐られる。馬鹿正直に跳ねる体が憎らしかった。私の体はこうも知り尽くされていて、与えられる快楽に抗えない。

「や、あ、あ……っ、い……！」

やがて耐えきれず、お腹の奥が収縮する感覚が波のように全身に広がる。

悔しさをひた隠すように腕を目元に当てて浅く胸を上下させる私に構うことなく、丹恒は私の股座の間に座り込み、問答無用で脚を開かせる。

「あ……っ、待つ……！」

制止の言葉は最後まで言わせてもらえなかった。仕方ないのだろう、既に私は一度了承してしまっているのだから。

はぷりと彼の口で秘部が覆われて、一際大きく体が跳ねる。私がこの行為に慣れないのは、耐えられないのは、あの丹恒がそんなことをしているという事実があまりにも倒錯的すぎるから。街を歩けば誰もが振り向くような端正な顔を、私の

そんなところにうずめて、自分で望んで舌を動かして。絶えず全身に広がる快感も相まって、真正面から受け入れたら頭がおかしくなってしまうようになる。

両手で顔を覆って、必死に羞恥と背徳感に耐えていた矢先。じゅる、と水音が立ち、思わず起き上がりかけて声を上げた。「っねえ！ それ……、っ」

いやだ、そう言いたかったのに。視線だけがこちらを向いたかと思うとその目は閉じられて。つぷりと舌先が埋め込まれ、途端に力が抜けた。

浅いところ、そのふちに沿わせるようにくると舐めて、抜いて、埋めて、抜いて。そのまま唇を押し当て、吸われる。

じゅ、じゅぷ、ちゅ、ぢゅう。わざとらしい水音は確かな刺激とそれ以上の羞恥を私に注ぎ込む。

ずるい、ひどい。私がどうしてそれが嫌なのか、どうして苦手なのか理解していてやめなかつもりだ。

「や、っ、やあ、やらあ……」

こんなの制止でもなんでもない、相手を煽るだけの弱々しい懇願。わかっていても恥ずかしすぎて止まらない。一切抵抗できない私を追い詰めるかのように、内腿に添えられた指に力がこもった。そのまま、柔らかな感触を擦り込むように膣壁をねぶられ続ける。細められた瞳は恍惚に濡れていて、まるでずっとこうしていたいと語りかけてくるみたいで。

……どうして、なんでそんなに嬉しそうにするの。ばか、

ばか、変態。

「あつ、いや、あああ——ッ……」

三度目の絶頂に子宮が小さく悲鳴を上げている。弛緩する体、こつ何回も簡単に達してしまつては力もうまく入らない。でも、約束したはず。私だつてあんたを気持ちよくしたい。だから少しだけ、息を整えさせて……、

「ひやあああつ!!」

私のそんな意思を伝える暇もなく、熱くて硬いものがみちみちと媚肉を割りながら押し入ってくる感覚に頭が支配された。

「ちよつと、あ、わたしも、するつていった、のにつ」

「……すまない。お前が扇情的すぎて堪えられなかった」

「はあ!? やつ、やだまつて、動かな、あ、ああつ」

じたばたと押し返そうとした手を取られ、そのまま股座の位置まで引つ張られる。

「やだ、やだつ、奥やだあ! あつ、んああ、ふ、あああ……つ!」

「あまり煽らないでくれ……止まれなくなる」

嘘つき。止めるつもりなんてないくせに。

こうして今回も私はこの男に流されて、好きなようにされて、結局それを受け入れてしまっているのだった。

大好きな人のあんな顔やこんな姿を見たいと思うのは、き

つと自然なことだ。

というのも。混沌としたインターネットのややアンダーグラウンドな部分でひしめく、人々が性欲を発散する目的で作られた映像やお話。そういったものはフィクションだと割り切っているつもりである。けれど何にでも興味のあるお年頃なのだ。きっかけは友人から勧められた漫画を読んでいたら流れてきた広告の誤タップ、そこから芋づる式に辿り着いた世界は、なんというか、宇宙の隅から隅まで網羅した性癖博覧会といえいいのか。とにかく私にとって未知の事柄で溢れかえっていて、たまにそういう気分でもないのにひとりべツドに潜つて気になる作品を流し見していた。そこで見つけたのだ。いわゆる女性優位、強気な男の人が、綺麗な女性に好き勝手されちゃうようなお話を。

そうして思い至つた。いつもいいようにされてばかりの私だつて、丹恒が限界ギリギリまで乱れてる姿が見たい!

「だから潮吹きさせます」

拳をぐつと握つて宣言した私に返ってきたのは、無言と心底嫌そうな表情だけだった。数秒後、丹恒が長い長いため息をつく。

「……理解はしたが、首を縦に振るかという話は別だ」

「大丈夫、あんたならいける。あんたならやれるよ」

「ここまで嬉しくない励ましもないな」

お、これは最近では珍しく本気で乗り気じゃなさそう。で

もそう簡単に引き下がる私じゃない。いつも好きなようにさ
れている分、要求を通す権利があるはず。そんな念を込めて
じーっと彼の目を見つめれば、丹恒は少し気圧された表情を
した後すんと真顔になり、顎に手を当てて呟いた。

「交換条件を提示してもいいか」

「……なに」

「俺も、同じようにお前に色々試したい」

思いもよらない提案にぴたりと思考が止まる。色々試す、
とは。

「私にも潮吹きさせたいってこと？」

「みなまで言うな。……だがまあ、そういうことになるな」

よく考えたら、私も『潮を吹く』ということが具体的にど
ういうことなのかはあまりわかっていない。今までに自分が
そうなったことがあるのかもわからない。……事に及ぶとい
つも最終的に私が何が何だかわからなくなってしまうのは、
目の前の男のせいだ。だからこそ、一泡吹かせてやろうと心
に決めたのである。

「……ふーん、わかった。私のことも開発したいってんなら、
やってみなよ」

あくまで私が優先なのだという気持ちで了承すると、丹恒
は何も言わずにデスクに向かい直し作業を再開した。あとは
夜の時間に、ってことかな。そしてここまで言っておいて一
抹の不安が私の脳内によぎったけれど、大丈夫。一朝一夕で

うまくいくとは思ってないし、なんだかんだで丹恒は折れて
くれるはず、私がやりたいと言ったことはちゃんとやらせて
くれるはず。彼が私に甘いというのはもはや火を見るより明
らかなこと。

あのサイトの人気ランキング上位作品みたいな、調子に乗
った結果仕返しとばかりにあれやこれやされちゃうヒロイン
なんかには私はない！

そう、

思ってたのに。

「ね、っ、もういやあ……っやら、やああ……！」

埋め込まれた二本の指にとん、とん、とん、と一定のリズ
ムで弱いところを刺激されながら、音を立てて突起を吸われ
て思わず泣き言がこぼれる。

「ッすわな……で、も、でない、からあ……」

股にうずまる彼の頭に置いていた両手に気付かぬうちに力
がこもって、透き通る角に指の付け根が触れた。その感覚が
くすぐったいのか、閉じられていた碧海色の瞳がちらりとこ
ちらを見やり、またゆっくりと伏せられる。責めの手が緩ま
ることを期待したのも束の間、膣口の内側を撫でながら蓄を
ぐりぐりとねぶられ、押し潰されるような快感が電流となっ
て全身を駆け巡った。

「らめつ、くる、く、きちや、あ、あああ……ッ」

中途半端に脱がされたせいで汗ばんだ体が大きく震えて、生ぬるい液体が股を伝う感覚が脳を侵す。ちゅぽ、と音を立てて唇が離れた。幾度となく虐められてすっかり調教されてしまった突起はぷつくりと赤く腫れて、余韻に浸りながら寂しそうにひくついている。

「……シートまで垂れてしまったな」

そう言いながら口元を拭う動きに、彼の顔を濡らしたのは愛液と唾液だけじゃないと気付いてしまつて、何度目かわからない羞恥の波が襲いかかってくる。なんで。どうしてこうなつたんだろう。私だつてこれまで私なりに色々調べて実践してきたつもりなのに、先に開発されていたのは私の方だつた。

あの宣言をしてから、丹恒は^{飲月}この姿で睦事に及ぶ回数が増えた。私に水分を摂らせるために雲吟を使うことは今までにもあつたけれど、わざわざ姿を変えるようになったのはその方が彼にとって都合がいいからなのだろう。その理由がなんとなくわかつてしまうから、悔しくてたまらない。

ぬかるみから指が引き抜かれた。てらてらと糸を引く液体が、丹恒の手のひらを伝っている。そんなの早く拭いてよ、と視線を逸らそうとした瞬間、滴つていく筋に薄くつややかな唇が添えられ、ゆつくりと舌が這つた。あまりに艶かしいその光景が私をひどく動揺させる。

「何して……ッ」

「ん……勿体無いと思っただけだ」

「ばか、変態……！」

力の入りきらない腕を叱咤しつつ起き上がり、白く滑らかな胸板にとんと手を当てる。後ろ手をついた丹恒の目の前に屈み込んで、膨らんだ中心にそつと手を添えた。

悔しい。負けたくない。負けるって何に。わからないけど！

「わたしだつて……丹恒のこと、気持ちよくしたいのに……」

「……星」

「ん……え、？」

前へと垂れ落ちた長い髪を掬われたかと思えば、そのままそつと顎を持ち上げられる。引き寄せられるように顔を上げると、額に小さな口付けが降りた。どうしたのと問いかけてよとするより先に、仰向けに寝転んだ丹恒の上半身に跨るよう促される。そこで彼が何をしたいのかを理解して、かあつと顔に熱が集まつた。

「こうすればお互いにできるだろう」

「わ、私にも恥じらいってもんが」

「……嫌か？」

「つ……その顔すれば私が折れると思つてるでしょ……！」

普段の仏頂面と大して変わらないはずなのに、どこかしゅんとした雰囲気醸し出すその表情に私はめっぽう弱く、そのせいでうやむやにされたことは両手で数えきれない。ああ

もう、どうにでもなれ。胸の内でそう叫びながら促されるままに二つ巴の姿勢を取れば、それでいいと言わんばかりに腰を引き寄せられた。もうどうしようもない、このとんでもなく恥ずかしい格好に理性が悲鳴を上げてしまう前に、やれることをやるしかない。

「尻尾、痛くない？」

「平気だ」

そういえば半透明になったりなんだりしたっけ、なんて場違いに考えてから、思考を眼前へと戻す。思ったよりもおぼつかない手つきで、それでもなんとか装束を外していけば、ぶるんと勃ちきった彼自身が顔を出した。脈打つそれにそつと両手を添わせて、先端をぱくりと口に含む。優しく扱きながら舌を使って刺激すると、丹恒の腰がぶる、と小さく跳ねた。

「つく、う……」

控えめに漏れたその声に、きゅん、と胸が締め付けられる。丹恒が気持ちよくなれるように、舌も口内も、喉も柔らかくして。ぬめりを纏わせるようににゅぷにゅぷと動かすたび、ぴくぴくと返ってくる反応に愛おしさを感じていたそのとき。親指で広げられた自らの秘部をゆっくりと味わうように舐め上げられる。

「ひうつ……!？」

既にとろとろにほぐれている内壁が、羞恥心に反してその

刺激に悦んでしまっているとわかって思わず眉間に皺が寄つた。

「ふ……う、う……ッ」

「つらくないか。口も手も止まっているが」

「んぷ……つう、るさい……!」

気遣うような台詞には余裕が含まれていて癢に触る。そもそもこの体勢がいいって言ったの丹恒じゃん、なんて恨み言も口に出せないまま、生ぬるくて、やわくて厚いものが内側に入り込んでくる感触に、びくりと腰が跳ねた。

「やつ……!？ あ、なか……なめひや、やああ……」

なんとか保っていたはずの強気な態度も、弱いところを責められれば簡単に崩れてしまう。くぷ、くぷ、くぽ、と舌を出し入れされるたびに体はがくぐくと震えて、腕から力が抜けて。突っ伏した鼻先に濃い雄の匂いを感じて、頭がくらくらする。

だめ……そんな激しくされたら、また、出ちやうから。

そう思った瞬間にさっと血の気が引いた。このままじゃ私、丹恒の顔に、思いつき……!

「まッ、待って、だめ！ だめっだめ、ら、めええっ……」

いやだ、そんなの絶対いや、嫌なのに。振り返った私の声が焦りを帯びていることに気付いているはずなのに、愛撫は止まないどころかしゅるりと腰に尻尾が巻き付いて、逃げようとしたところを引き戻される。

だめ、だめ、うそでしょ、やめてくれない。それどころか中とクリと一緒に舐められて、だめ、こんなの……我慢、できない……

「お……ッ、あ、あ、ああ………っ」

一際大きく体が跳ねて、股からあたたかな液体がじよぽつ、と勢いよく吹き出したのがわかった。やってしまった、なんて思ってももう遅い。余韻に震える体に力が入っては抜けてを繰り返すたび、ぴゅ、ぴゅく、と余さずに出てきてしまう感覚と、それすら彼に飲まれてしまっているという事実が一層思考力を奪っていく。

「……もう、すっかり癖になったな」

どこまでも優しい、けれど獣の唸りのような獰猛さを秘めた声色に背筋が震える。へたりと力尽きた腰を起き上がった丹恒の腕に引き寄せられ、そのままころんと寝返りさせられた。

視線を上げた先。間違いなく私のせいで濡れた頬や口元、舌なめずりするその表情は、艶やかな長い濡羽色も相まって、息を呑むほどに妖艶だった。

「俺の手でお前が変えられていくと思うと、たまらなくなる」
引き締まった体がゆっくりと覆い被さってくる。熱いものをずりゆ、ずりゆ、と擦り付けられて、その度に秘豆と膣口に引つかかる感覚が私の中の期待と恐れに似た何かを煽る。

「ま……待って、おねが……」

いったばかりなのに。今挿入ってきちやったら、本当に、ダメになっちゃう。あてがわれたそれから逃げようとわずかに腰を引けば、きゅ、と胸の天辺を摘まれて咎められ小さな抵抗すらできなくなる。

そうして心身ともに逃げ場を失った私にとどめをさすかのように、ずぶぶつ♡ と、一気に最奥までを穿たれた。

「………ッ!? あ、おっ……♡」

ぱち、ぱちん、と視界が白く明滅する。さつき残さず出てしまったはずの液体が、体の痙攣に合わせてぷしゅぷしゅと吹き出しては結合部を濡らす。もう言うことなんか聞いてくれない体は呼吸すらうまくできなくて、喘鳴に近い音が喉からこぼれた。

「……星、水分補給をしろ」

「ッ……! ん、う、ん………っ」

見兼ねた丹恒が手のひらに収まる程度の大きさの水の玉を喚び、私の口元にあてがうのをぎゅつと唇を引き結んで拒む。心遣いはいがたいけれど、その奥にある思惑に私はちゃんと気付いていた。これ以上痴態を晒すくらいならいっそ干からびてしまった方がいい。そんな意地くらしいしか、私にはもう残っていないかった。

「……仕方がないな」

「……ッ、んうっ!」

まるで子どもを相手にするような声色で呟くと、丹恒は手

元の水をはくりと口に含み、そのまましつかり密着するように唇を重ねてきた。やんわりと器用に唇をこじ開けられて冷たい水が口内に流れ込んでくれば、否応なしにこく、こくんと喉が上下する。素直に飲み込んだことに気をよくしたのか、撫でるように私の髪を梳く指先がいやに優しくて恨めしい。

喉を通っていく冷たさが心地よくてぼんやりし始めた頭は、お腹に埋め込まれたものによって急速に快樂へと引き戻される。

「ん~~~~ッ……♡」

唇を塞がれたまま抱きしめられ、ぐりゅ、ぐりゅ、と角度を変えて先端を押し付けられて苦しいほど圧迫されているはずなのに、内側をきゅうきゅうと締め付けるのを止められない。全身を余すことなく愛してもらっている感覚が、私の心も体もどろどろに溶かしていく。

頬に唾液とも水とも思わしき冷たさを伝えながらも与えられるものをやつとの思いで飲み干せたと思ったら、そのまま熱い舌に自らのそれを絡め取られる。じゅぷじゅぷと頭に水音が響いて、背徳感と悦楽に視界が霞みはじめた。

「んっ、ふ♡ んん~~~~ッ……！」

背中に腕を回してしがみつけば、さらさらとした黒髪の下に汗ばんだ肌の熱を感じて、それすらひどく愛おしい。必死な私の様子を見て丹恒は優しく目を細めた。伏せられた睫毛の長さに見惚れて、本当に綺麗な顔だなあ、なんてとろけた

思考で考える。けれど、そんな穏やかな時間は長く続いてはくれない。

ぬる~~~~ッ……♡

「……ッ、ん、う、う~~~~ッ……」

ぬぷ~~~~ッ……♡

「んむ~~~~ッ♡」

ゆつくりと、形を覚え込ませるようにはめ込まれて、甘いきずると同時にしよわああ……と粗相するみたいにとめどなく潮が吹き出してしまふ。ぶるりと丹恒の体に力がこもって、耳元に届く息遣いが荒くなる。

「っ、は……星、わかるか？ 潮を吹くたびに、内側が細かく震える……」

「や……あう、やらあ、いやああ……」

あまりの羞恥に耐えられない。目元に手を当てて子どものようにぶんぶんと首を振っても、甘やかな抽送は止まない。奥を突かれるたびにはしたなく飛び散る潮を止めることもできなくて、それどころか膣壁と襞の全部で彼自身にきゅうきゅうといじらしく絡みついてしまふ。

「……かわいいな、……っ、俺も……そろそろ、限界だ」

律動が性急さを増す。余裕のない息遣いと衣擦れの音、肌と肌がぶつかる音に卑猥な水音が混ざる。泣きたいくらいに気持ちよくて、意識が飛んでしまいそうになるのを必死で繋ぎとめる。

「たんこつ、また、まひやイクうつ、んぐ、うあああ♡」

「は、あッ……、星……っ！」

「んおッ♡　いく、いく、いくいく、い、ううう……ッ♡」

びくん、とふたり同時に大きく痙攣する体。やがてどくどくとお腹の奥に重たいほどの熱を感じて、それすら脳を侵す快楽に変わる。熱い頬に触れるだけの口付けを贈ると、すりと鼻先を擦り合わせ、そのまま唇を柔く喰まれた。互いにゆったりと絶頂の余韻に浸りながらも、ふ……と長く息を吐いた丹恒が緩慢な仕草で上体を起こした。やがて、ぬぽ、と粘着質な感触を残しながら熱が引き抜かれる。

「ふ、あ……♡　は……、はあ……」

ぐしやぐしやになったシーツの上で、まだ力の入らない体を丸まらせながらずりずりと半回転させる。髪をかき上げて浅く呼吸する丹恒が、もぞもぞと動いている私に気付いた。

「……星？」

なんとか頭を彼の股座まで移動させて、芯の残る中心にぺとりと指を添える。白濁と愛液にまみれたそれに舌を這わせると、丹恒は何も言わずに、わずかに体を強張らせた。鼻腔に二人分の性の残り香が届き、ふわふわと脳が溶けていくような心地になりながら、ちゅぽ、じゅぷ、と音を立てて舐め吸う。

「は、あ、……つく……」

「ん、んむ、ふ♡　う……♡」

奥まで咥え込んで、喉奥で扱くようにぐぶぶと上下させる。苦しいけれど、快楽に震える彼の姿が私をもっともつと欲しがらせる。自分でも留めることのできない甘く濡れた声が口の端から漏れて、口内の熱がずくりと質量を増した。

「……星、もう、」

余裕を失った声色が止めるように呼びかけているのはわかっていた。さすが丹恒、あれだけ出してもまだまだ元気なのは恐れ入る。だからこそ私も手を変え品を変えするしかない。

「……、ん……♡」

「ッ待て、……本当に、っ……出る……！」

そんな懇願はどこ吹く風で、ぎりぎりのぎりぎりを攻めてやる。あともう一回、いや二回。そうして震える背中が耐えきれず丸まった瞬間にもう一度だけ喉奥までたつぷりと咥え込んでやってから、ぷはつと口を離れた。びくびくびく、と丹恒の腰が震える。見上げた先、苦しげに歯を食い縛るその表情がかわいくてかわいくて、私の悪戯心が少しだけ満たされた気がした。先端に視線をやると、それでも堪えきったのか、透明な液体がわずかにふくらんでいるだけだった。

「……っ、……やってくれたな」

その恨めしそうな表情を見て、にへらと笑みがこぼれた。「ふふ……♡　だって、まだ終わりじゃないよ」

私の『開発』は、ここからが始まり。しっかりと焦らして、

時には寸止めだとして、絶頂の感覚のさらに向こう側まで到達させる。女性にさせるよりも難易度が高いなんてことは百も承知だ。そこに辿り着くまでにどれだけいいように丸め込まれて何度啼かされたって、私は諦めてなんかやらない。

「ちやあんと、私にも付き合ってよね？」

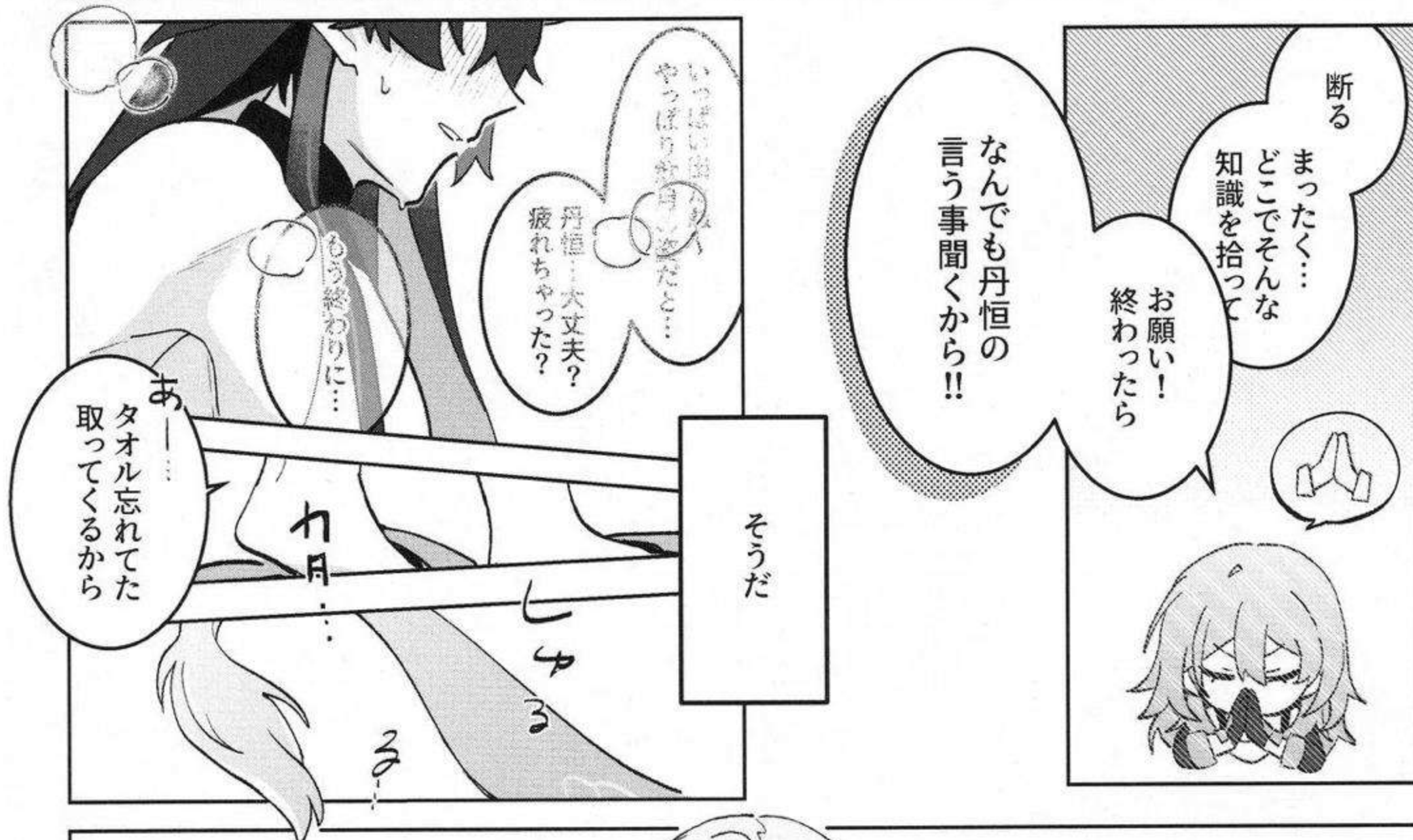
絶対に手を抜かないのは、お互い様なんだから。



Moon
Drops











Moon
Drops



この後朝まで
解放されなかった

siriカプトムシ胃袋





Moon
Drops

Moon
Drops



…飲月の
あんたについて

改めて
聞きたいこと？

ぜんぶあげたい
佳

…えつと

聞いて
欲しい
ってこと？

……まあ

あの時とは
状況がずいぶん
違うからな

じゃあ

普通の
あんたとは
何が違うの？

そうだな

身体的な
特徴で
言うとは…

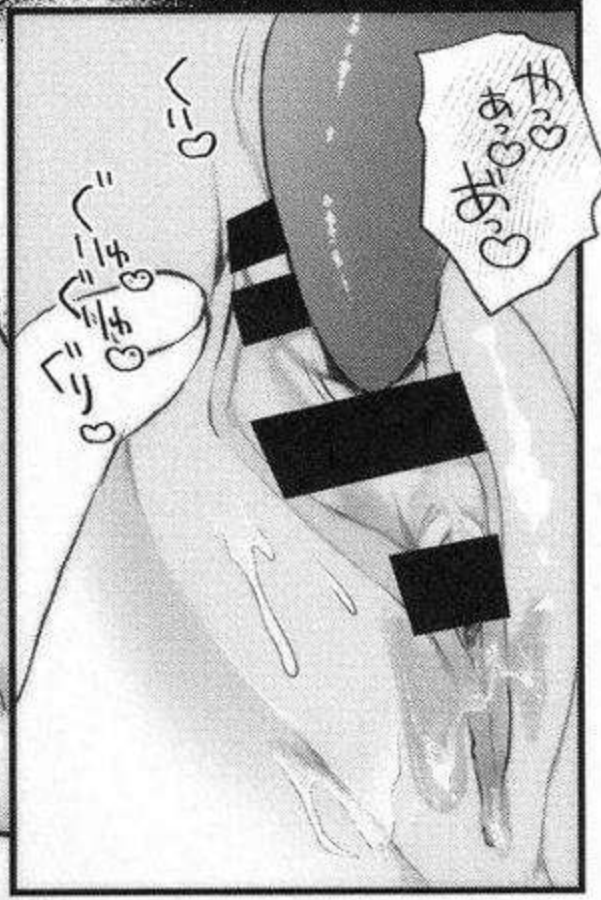
こういう
ところだろうか

エツツツツ

……チすぎ
ない？

……
試して
みるか？

エ



舌あ……♡
はいって……♡

あ……♡

あ……♡

Moon Drops

2026/06/28

そえもの/はるお	なるかみ本舗/なるかみ
hrohro0001@gmail.com	narukamitaki@gmail.com

印刷所
くりえい社(株)様

転売は禁止です。
この本をWebサイトなどに無断転載した場合、見つけ次第使用料を請求させていただきます。
ネットオークション、フリマアプリでの転売はご遠慮ください。
処分する際は同人誌専門の中古書店に売却していただくか、
中身が分からない状態にしていただいた上で可燃ゴミとして廃棄してください。

あとがき

合同誌やりたいねって話をしていたのが実はリアルに1年くらい前で
ずっとタイミングが合わなかったんですが、今回ついに発行することができました
テーマはどうする？って話になった時に
は「W潮吹き描きたいんですよ〜」
な「あ、私放尿させたいです放尿」

という上級者向けな会話をしたのが昨日のここのように思い出せます
素敵なおゲスト様たちにもご協力いただいたおかげで
なんだかすごい本になりました 本当にありがとうございます！

本来は「月の雫」〜外伝〜、というふざけきったタイトルだったんですが
ゲスト様方が集まるにつれてもうちょいイイ感じのタイトルにした方がいいのでは…？
となり、あのようなタイトルになりました(英語にしましたけど…！)

やりたい放題させていただきました「汁だく飲星」BOOK
お楽しみいただけましたでしょうか？
個人的には念願の飲月本を出せたということですね 最高にHAPPYです
お付き合いいただいたなるさん、お読みいただいた皆様
ありがとうございました〜！！

はるお

飲星本を描きたい描きたいと言い続けて
早1年ちょっとほど、ようやく描くことができました…！
こんなアホ企画に付き合ってくれたはるおさん、
ゲストの皆様本当にありがとうございます！！
圧倒的感謝…！！！！
念願の飲星、念願の放尿ということで
少しでも楽しんでいただけたら嬉しい限りです。

なるかみ

Honkai : Star Rail Unofficial fanbook
Dan Heng × Stelle
Presented by なるかみ本舗/そえもの

